〔論　文〕

短大生の幼児と関わる効力感と遊びの好みの関連

The Relationship between College Students' Sense of Efficacy in Interacting with Children and their Play Preference

藤　田　　文
Fujita Aya

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship between the female college students' sense of efficacy in interacting with preschool children and the play preference. Female college students　responded to a questionnaire asking about the sense of efficacy in interacting with preschool children and the kind of play when they play with children. The plays were consisted of two types ; typical play and atypical play. Two types of studies were conducted: one method of choosing play pairs and the other method of evaluating play independently.　The results showed that those with a high sense of efficacy in engaging with children showed a preference for atypical play compared to those with a low sense of efficacy. Similar results were obtained in both studies. It is suggested that the degree of efficacy in engaging with children influences their choice of play.

Key words :sense of efficacy, play with children, female college students, play type

【問題と目的】

大学生にとっては，同世代の友人とだけでなく，子ども達のような世代の異なる様々な人々とコミュニケーションがとれることは重要な課題となる。世代間のコミュニケーションによって異なる視点の獲得が可能となり，複雑な社会への適応を促進すると考えられるからである。また，自分が親になる前の学生時代に，子どもと関わる経験をして，子どもと関わる自信を高めておくことは親準備性の観点からも意味があると考えられる。しかし，大学生の日常生活の中では，子どもと関わる機会はあまり多くはない。従って大学生の中には，子どもと関わることに自信が持てない学生もいる。このような子どもと関わることに対する自信，すなわち効力感が低い学生が，自信を持ち効力感を高めるためにはどのようなことが必要だろうか。

子どもと関わる効力感を高めるための要因を明らかにするためには，効力感の高い学生と低い学生を比較し，その違いを検討する必要がある。従来，幼児と関わる効力感の高い学生と低い学生の違いが検討されてきた（藤田 ,2002,2004,2008）。これらの研究では，まず，学生の幼児との関わりに対する効力感を測定する。それにより学生を，効力感の

高い学生と低い学生に分類して，様々な要因を比較している。

藤田 (2004) では，幼児と関わる効力感ときょうだい構成と幼児と接した経験の関連が検討されている。この研究では, 年下のきょうだいがいる人は, 年下の人とのコミュニケーションを取る機会が多いため，幼児と関わることに対して慣れが生じて効力感が高いのではないか考え，きょうだい関係を比較した。その結果，自分より年下のきょうだいがいるかどうかという点と効力感の程度との関連はみられないことが示された。また，効力感の高い学生と低い学生でこれまでに幼児と接した経験の量を比較した。その結果，効力感の高い学生は低い学生よりも経験得点が有意に高く，幼児と接した経験が多いことが示された。従って, きょうだいとの経験というよりは, 様々な実習や近所の幼児たち, 親戚の幼児たちと接した経験が効力感と関連していることが明らかになった。効力感が低い学生は特に効力感を低下させるようなネガティブな経験をしているというよりは, 経験の量が少ないことから効力感が持てないでいることが示唆された。

藤田（2002）では，幼児と関わることに対する効力感が高い学生と低い学生が幼児と遊ぶ際，どのように幼児とコミュニケーションをとるのかが検討された。この研究では，幼児との会話の中で大学生が話題を変えて話の流れが途切れた部分，幼児との会話の流れを考慮しない大人としての発言，会話の文脈とは離れた唐突な質問など，幼児との会話の流れに焦点をあてて検討した。その結果，効力感が高い学生は，会話の途切れや唐突な質問が少なく，幼児のその時に行っている遊びに関連したような質問をしたり，幼児の興味関心を満たすような話題を選択しているが，効力感が低い学生は，その時の幼児の遊び内容には無関係な唐突な質問をしたり，会話の途切れが多いことが示された。

また藤田 (2008) では，同様に効力感が高い学生と低い学生のスキンシップの重要性の認識が異なるのか，また，実際に幼児と接する場合にスキンシップの量が異なるのかどうかを検討した。その結果，効力感が高い学生の方がスキンシップを重要視しており，実際に幼児と接する場面でも効力感が高い学生の方が幼児と多くスキンシップを取っていたことが明らかになった。

これらの従来の研究から，幼児と関わる効力感が低い学生は，幼児と関わる経験が少ないために，子どもとの会話の継続性のような言語的コミュニケーションスキルやスキンシップをしながら関わるような非言語的コミュニケーションスキルを獲得することができていない可能性が示唆される。

幼児の生活は遊びが中心であるため，幼児とのコミュニケーションは，遊びの内容によって規定される部分があるのではないかと考えられる。保育者養成に関する研究において，幼児の遊びを認識することが子ども観に影響し，保育者としての資質や自信を獲得することに関わってくると指摘されている（毛利 ,2018)。毛利（2018）の研究では，実際に保育科の学生は幼児の遊びのイメージの評価が全般的に高く，遊びに対する肯定的イメージや遊びの重要性の認識が保育者の資質として重要であることも示されている。従って，遊びの内容に着目して，幼児と関わる効力感の違いについて検討することは意義があると考えられる。本研究では，幼児と関わる効力感が高い学生と低い学生で，幼児と何をして遊びたいと思うのか遊びの好みが異なるのかどうかを検討することを目的とする。

特に，遊びのルールが明確な定型遊びとルールを自由に展開できる非定型遊びという

自由度の違いに注目する。定型遊びでは，遊びのルールが明確で関わり方が決まっているため，自由度は低いが，言語的なコミュニケーションがとりやすいと考えられる。一方非定型遊びでは，自由度が高く，遊びのルールを変えたり，状況に応じて展開を広げたりできるため自由に楽しめるが，柔軟な対応や発想が求められると考えられる。幼児との積極的な関わりを持とうとする効力感が高い学生は，自由度の高い非定型遊びを好み，一方苦手な学生は，決まった形で遊びやすい自由度の低い定型遊びを好むするという遊びの好みの違いが見られるのではないかと予想される。

遊びの好みの測定方法として，定型遊びと非定型遊びを対に設定して，どちらかを選んでもらう方法と，定型遊びと非定型遊びをそれぞれ個別に設定して好みを評定してもらう方法がある。従って，研究 1 では遊びを対に設定してどちらを選ぶかを明確にする方法を採用し，研究 2 では遊びを個別に設定して好みの程度を比較する方法を採用して，効力感による違いを検討していく。

【研究１】

幼児と関わる効力感が高い学生と低い学生で，幼児と遊びたい遊びが異なるのかどうかを，定型遊びと非定型遊びを対に設定して検討することを目的とする。また，選択の理由についても明らかにする。

【方　法】

調査対象者：本研究の調査対象者は，短期大学 1 年生女性 80 名だった。

手続き：質問紙調査が講義時間中に集団で実施された。質問紙調査の内容は以下の通りだった。

（1）幼児と関わる効力感

幼児と関わる効力感を測定した。藤田 (2002) で作成された幼児との遊びをうまく行える効力感に関する項目を採用した。具体的な項目は, Table1 に示されている。Table1 の「幼児とうまく遊びを続けられる」「幼児との遊びを楽しめる」等 9 項目について，自分にあてはまる程度を「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 段階で評定してもらった。

Table 1
幼児との遊びに対する効力感の程度の測定

１．最初にうまく幼児の遊びに入っていける
２．最初にうまく幼児を遊びに誘える
３．幼児とうまく遊びを続けられる
４．幼児にうまく話しかけることができる
５．幼児とうまく会話が続けられる
６．幼児と遊ぶのに体力が続く
７．幼児との遊びを楽しめる
８．幼児になついてもらえると思う
９．幼児を楽しませることができると思う

（2）幼児と遊ぶ場合の遊び選択

幼児と遊ぶ場合に何をして遊ぶかについて，遊びの対のどちらかを選択してもらった。遊びの対は「ままごと－滑り台」「折紙－かくれんぼ」「泥遊び－グリコ」「くすぐり－こおりおに」

「お絵かき－トランプ」の 6 種類だった（Table 2 参照）。これらの遊びは遊びの自由度の違いで，自由度の低い定型遊びと自由度の高い非定型遊びで，対を構成されていた。遊び相手が男児の場合と女児の場合を設定し，それぞれについて回答してもらった。「あなたがこれから幼児と一緒に遊ぶことをイメージしてください。自分が幼児に誘いかけるとすれば，何をして遊びますか。次の 2 つの遊びのうち遊びたい方をどちらか 1 つ選び，○をつけてください。」と教示し，回答してもらった。

Table 2
遊びの選択対

ままごと	― 滑り台
折り紙	― かくれんぼ
くすぐり	― こおりおに
おにごっこ	― タイヤ遊び
泥遊び	― グリコ
お絵かき	― トランプ

次に対の遊びを選択した理由を，それぞれ Table3 の 15 項目の理由の中から 3 個ずつ選択してもらった。

Table 3
遊びを選んだ理由の選択肢

1. 自分が苦手ではないから
2. 自分が疲れなくて良いから
3. 集団で遊べるから
4. 自分と子どもが汚れなくてすむから
5. 自分がやっていて恥ずかしくないから
6. ほめてあげやすいから
7. 体を使ったほうが楽しそうだから
8. 決まった遊びなので、遊ぶ内容を考えなくてよいから
9. 一対一で遊べるから
10. 子どもが好きで喜んでくれそうだから
11. 自分も楽しめるから
12. 子どもと話ができそうだから
13. 子どもが感情を出してくれそうだから
14. 子どもから話してくれそうだから
15. 自分はやらなくてすむから

【結　果】

幼児と関わることに対する効力感の程度によって調査対象者を 2 群に分類した。効力感の程度を測定する 9 項目の合計点を算出し，平均点以上を効力感高群（40 名）とし，平均点未満を効力感低群（40 名）として，分析対象者とした。

幼児と関わる効力感の高さによって遊びの選択が異なるのかどうかを検討した。男児に対する場合と女児に対する場合を合わせて選択を分析した。定型遊び（滑り台・かくれんぼ・グリコ・こおりおに・トランプ）と非定型遊び（ままごと・折り紙・泥遊び・くすぐり・お絵かき）の遊びの対の選択を合計した。その結果を Table4 に示した。Table4 より，効力感高群は非定型遊びを，効力感低群は定型遊びをやや多く選択する傾向にあることが示された。つまり，効力感高群は幼児と一緒に遊ぶ際に，自由度が高く幼児と一緒に遊

びを展開していける遊びを選択する傾向にあった。それに対して，効力感低群は，遊び方が決まっていて自由度が低く，遊び方を考える必要のない遊びを多く選択する傾向にあった。これらのことから，幼児と関わる効力感の程度によって遊びの好みに違いがある傾向が明らかになった。

次に，遊びの選択理由について分析した。それぞれの対の遊びを選んだ理由を 3 個ずつ選んでもらったため，定型遊びと非定型遊びで，また男児と女児とですべて選択数を合計して，効力感群で比較した。理由の 15 項目のうち，効力感高群と低群で選択数が 10 個以上異なるものを Table5 に示した。

Table5 より，効力感高群と低群で「子どもが好きで喜んでくれそうだから」という理由が多く，効力感低群でも幼児のために遊びを選択していることが示された。また，効力感高群では，この他に「体を使った方が楽しそうだから」「子どもが感情を出してくれそうだから」「子どもと話ができそうだから」「ほめてあげやすいから」といったように，幼児側の視点からの理由と，幼児との関わりを重視した理由が多いことが示された。一方効力感低群では，「自分が苦手ではないから」「決まった遊びだから遊ぶ内容を考えなくてよいから」といった自分側の視点からの理由が多いことが示された。

Table 4
効力感程度別の遊び選択の自由度の違い

	定型遊び （滑り台・かくれんぼ・グリコ・こおりおに・トランプ）	非定型遊び （ままごと・折り紙・泥遊び・くすぐり・お絵かき）
効力感高群	１７２	２２８
効力感低群	２１３	１８７

注：数値は男児女児の合計の選択数である。

Table 5
効力感別遊びを選んだ理由選択数

【効力感高群が多い項目】	効力感高群	効力感低群
子どもが好きで喜んでくれそうだから	２７６	２１０
体を使ったほうが楽しそうだから	２４０	１８１
自分も楽しめるから	１８７	１６０
子どもが感情を出してくれそうだから	１５１	９２
子どもと話ができそうだから	１２７	８７
ほめてあげやすいから	９２	６１
一対一で遊べるから	３３	１６
【効力感低群が多い項目】	**効力感高群**	**効力感低群**
自分が苦手ではないから	９６	１８５
決まった遊びなので遊ぶ内容を考えなくてよいから	６７	１０８
自分がやっていて恥ずかしくないから	１３	３２
自分はやらなくてすむから	２２	３２

【考　察】

幼児と関わることの効力感高群と低群では，幼児と遊ぶ際の遊びの好みが異なる傾向にあることが示された。効力感高群は非定型遊びを選択する傾向にあるが，効力感低群は定型遊びを選択する傾向にあることが示された。また，遊び選択の理由についても違いがあることが示された。効力感高群は幼児側の視点と幼児との関わりを重視した理由を選択するが，効力感低群は自分側の視点を重視した理由を選択することが示された。

効力感による遊び選択の違いは，幼児との関わり方の違いを示していると考えられる。効力感高群は，おままごとや泥遊びなど自由度が高く，そのつどやり方を考えなければならないような遊びでも対応できると考えられる。また，自由度が高い分，子どもとの会話が広がったり，子どもをほめてあげたりなど，状況に応じた深い関わりができる可能性を楽しめることを示していると考えられる。

一方効力感低群は，自由度が高いと，自分が対応できずどう遊んでいいかわからないことに不安を感じると考えられる。自分が苦手ではないというその遊びで遊べる見込みがあれば，幼児と関われると考えているようである。つまり，効力感が低い学生であっても，定型遊びのような遊びであれば，幼児と関わることができるのではないかということが示唆される。

本研究では，効力感による遊び選択の傾向は示せたが，二つの遊びのどちらかを選ぶ質問形式だったためこの傾向が出たとも考えられる。従って，一つ一つの遊びを独立して回答した場合も同様の違いが得られるのかどうかを検討する必要がある。また，対象者の人数も増やす必要があると考えられる。

【研究２】

幼児と関わる効力感が高い学生と低い学生で，幼児と遊びたい遊びが異なるのかどうかを，定型遊びと非定型遊びを個別に設定して検討することを目的とする。

【方　法】

調査対象者：本研究の調査対象者は，短期大学 1 年生女性 412 名だった。

手続き：質問紙調査が，講義時間中に集団で実施された。質問紙調査の内容は以下の通りだった。

（1）幼児と関わる効力感

幼児との関わる効力感を測定した。研究 1 で使用した質問項目と同様のものを採用し，同様の手続きで回答してもらった。

（2）幼児と遊ぶ場合の遊びの好みに関する質問

これから幼児と一緒に遊ぶことを想定し，自分から誘いかけるとしたら，次の遊びをどの程度したいと思うかを 5 段階で評定してもらった。

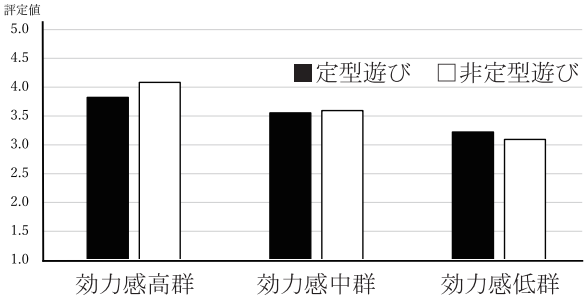
遊びの種類は，遊び内容の自由度の低い定型遊びとして，かくれんぼ，こおりおに，グリコ，トランプの 4 種類，自由度の高い非定型遊びとして，お絵かき，泥遊び･砂遊び，お母さんごっこやヒーローごっこなどのふり遊び，くすぐったり身体でじゃれ合ったりする遊びの 4 種類を設定した。それぞれの遊びについて，遊びたいと思う程度を，「非常に遊びたい」から「まったく遊びたくない」の 5 段階で評定してもらった。

【結　果】

幼児と関わることに対する効力感の高さによって，調査対象者を 3 群に分類した。効力感を測定する 9 項目の合計点を算出し，効力感得点が 45 点から 34 点を効力感高群（125 名），33 点から 27 点を効力感中群（171 名），26 点から 9 点を効力感低群（116 名）とした。

定型遊び 4 種類と非定型遊び 4 種類の評定値の平均点を算出した。効力感群別の平均値を Fig. 1 に示した。Fig.1 のデータに基づき，3 効力感群（効力感高群・効力感中群・効力感低群）×2 遊び内容（定型遊び・非定型遊び）の 2 要因の分散分析を行った。その結果，効力感群の主効果が有意だった（$F(2,409)=58.65, p<.01$）。Tukey 法による下位検定の結果，効力感高群が中群よりも，中群が低群よりも全体的に評定値が高いことが示された。つまり，効力感が高い学生は定型遊びも非定型遊びもしたいと思い，低い学生はどちらの遊びもあまりしたくないと思っていることが示された。

Fig.1
効力感別の遊び評定（定型・非定型）

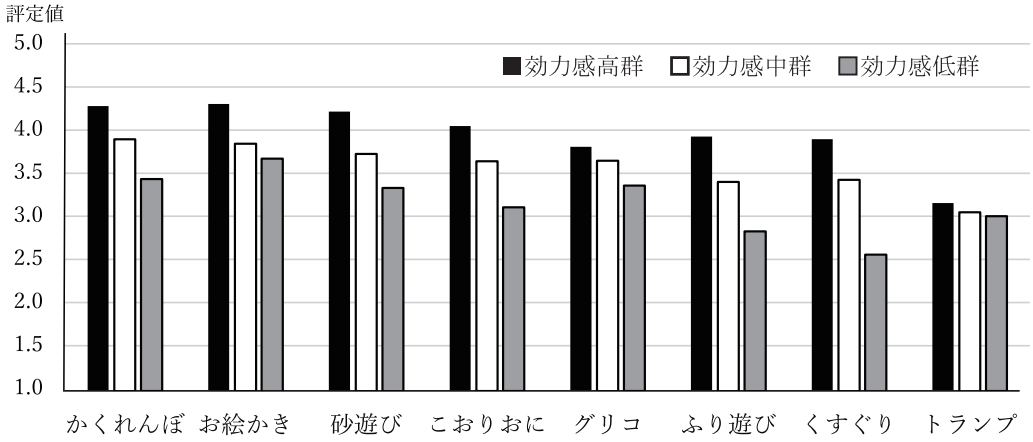


また，効力感群と遊び内容の交互作用が有意だった（$F(2,409)=9.31, p<.01$）。Tukey 法による下位検定の結果，効力感高群では非定型遊びが定型遊びよりも評定値が高いが，効力感中群と低群では非定型遊びと定型遊びに違いがみられないことが示された。つまり，効力感が高い学生は定型遊びよりも非定型遊びを幼児と一緒にしたいと思っていることが明らかになった。

次に，遊びの特質の影響を詳細に検討するために，遊びごとの評定値の違いを検討した。各群の遊びごとの平均評定値を Fig.2 に示した。Fig.2 より，かくれんぼとお絵かきがどの群でも幼児と遊びたい上位で，トランプがどの群でも下位の方だった。全体的な遊びの好みの順位は，効力感群による大きな違いはみられなかった。効力感群による違いが大きい遊びは，ふり遊びとくすぐり遊びだった。非定型遊びの方が効力感による好みの違いが大きいことが示された。

しかし，非定型遊びであってもお絵かきは効力感低群でも好まれていた。また，定型遊びであってもトランプやこおりおには，効力感低群でもあまり好まれていなかった。

Fig.2
効力感別の遊び評定



【考　察】

研究 2 では，各遊びを対比ではなく独立に評定してもらって，効力感による遊びの好みの違いを検討した。その結果，効力感高群は低群よりも全体的に遊びの評定値が高かった。幼児と関わる効力感が高い学生は，低い学生に比べてどのような遊びであっても積極的に幼児と遊びたいと思っていることが示された。このことから，幼児と関わることは，遊びに対する意識が大きく関わっていることが示唆される。

また，研究 1 と同様に，効力感高群の方が中群や低群よりも非定型遊びを好むことが示された。効力感が高い学生は，非定型遊びで幼児と一緒に遊びを作ったり会話をしたりしたいと思っていることが示唆される。研究 1 の結果がさらに支持されたといえよう。さらに，遊びごとの分析の結果，とくに，ふり遊びとくすぐり遊びでは効力感高群と低群の違いが大きいことも示された。なりきって遊びのストーリーを考えなければならないふり遊びや，身体接触が多く相手の反応を見ながら関わらなければならないくすぐり遊びなどの自由度の高い非定型遊びは，効力感の高い学生に好まれるが、効力感の低い学生にとっては難しく感じられる遊びであることが示唆される。

しかし，遊びの好みの順位は効力感によって大きな違いは見られなかった。個々の遊びの特性によって，好みに違いが見られたからだと考えられる。効力感低群に，非定型遊びのお絵かきが好まれ，定型遊びのこおりおには好まれなかった。このことから効力感低群は，動きの激しくない遊びを好む可能性も示唆される。また，トランプはどの群でも好まれなかった。幼児のルールの理解度を考慮したと考えられる。さらに、トランプは大学生と幼児が一緒に行う場合，勝敗のコントロールが難しいと考えられる。トランプは，どうしても大学生の方が勝ってしまうことが多くなるため，幼児を楽しませられるのかを気遣ってしまい，好む人が少なかったのではないかと考えられる。

従って今後は，遊びの自由度だけでなく，動きの強度やルールの困難度など多次元的な側面に関して遊びの分類を考慮していく必要があると考えられる。

【総合考察】

本研究の目的は，幼児と関わる効力感が高い学生と低い学生で，幼児と何をして遊びたいと思うのか遊びの好みが異なるのかどうかを検討することだった。特に，遊びのルールが明確な定型遊びとルールを自由に展開できる非定型遊びという自由度の違いに注目して比較した。

研究 1 と 2 の結果から，幼児と関わる効力感によって遊びの好みに違いが見られ，効力感が高い学生は非定型遊びを好み，効力感が低い学生は定型遊びを好むことが明らかになった。遊びの選択理由にも違いが見られ，効力感が高い学生は幼児側の視点を重視して関わりが増えるような理由が多く，効力感が低い学生は自分側の視点も重視している理由が多いことが示された。

効力感が高い学生は，全体的に遊びの評定値が高く，幼児の遊びそのものに関心が高い。これは，効力感の高い学生は，毛利（2018）で示されている保育科の学生と同様で，幼児の遊びに対する肯定的イメージや遊びの重要性の認識を強く持っていることが示唆される。また，遊び選択の理由が幼児側の視点が多いことから，効力感の高い学生はmind-mindedness（以下MMと略）が高いと考えられる。MMは，Meins（1997）により提唱されたもので，養育者の特徴として幼い子どもの心的状態に目を向け，心を持った一人の人間として子どもを扱う傾向のことである。Meins（1997）は，養育者のMMは，子どもが心を理解するための適切な足場を提供していると仮定している。Meins(2003) では，MMが高い母親の子どもはアタッチメントの安定性が高いことが示されている。また篠原 (2006, 2011) では，MMの高い母親が，4 歳児の感情理解や語彙能力を促進することを示している。これらの研究から，効力感が高い学生は，幼児の心を重視し，幼児の感情や言葉を引き出し，ほめることを意識して，幼児の心の安定を促進している可能性があることが示唆される。

一方，効力感が低い学生は，全体的に幼児の遊びに関する関心が低く、遊び選択の理由は幼児側の視点が全くないわけではないが，自分側の視点からの理由が多く，効力感が高い学生と比べるとMMが低いことが示唆される。従って，効力感の低い学生がMMを高められるように，幼児の動機や感情の状態に注目させ，スキンシップやほめることで肯定的な心の動きが生じることなどを理解してもらうことが重要であると考えられる。ただし，自由度の少ない定型的な遊びで関わることが望ましくないわけではない。効力感の低い学生は，自分に苦手意識のない遊びなら関われるというのであれば，定型的な遊びで幼児との関わりを増やしていくことも重要である。

近年いくつかの種類のペアレントトレーニングが実施されているが，いずれも遊びを通して，子どもの非認知能力，すなわち主体性や柔軟性や想像力や自制心等の発達を促進することが重視している（ボーク , 2018 ; 田中 , 2023）。また，ペアレントトレーニングの効果として，他者と出会い，内省的セルフコントロールを用いて葛藤を乗り越え，子どもの全人的承認が可能となり自己受容に至るということが示されている(Suzki,Tsujiko,Toyama,Uehara,Kobayashi,2023)。つまり，親の自己肯定感を高めることが必要だと示されている。本研究では，まだ親にはなっていない学生が対象となっているが，これらのペアレントトレーニングの考え方からも，効力感の低い学生にとっては，子どもの内面に目を向けて，自分の得意分野の遊びで子どもと関わっていき、大学生自身の

自己肯定感を高めていく視点が欠かせないことが示唆される。

本研究では，遊びの名称を提示して評定してもらったが，「くすぐり」「ふり遊び」など遊びの名称からイメージされる内容が，対象者ごとに異なっていることも考えられる。従って，遊び評定の際の提示方法については，遊び場面をイメージしやすいようにしていくことが今後の課題である。また本研究では，対象者が女子学生に限定されていた。しかし，性別に関わらず育児を行っていくし，幼児と関わる能力はどのような場面でも必要になってくる。従って，今後は男子学生についてもデータを集めて，女子学生との比較を行っていく必要があるだろう。

【引用文献】

ボーク 茂子 (2018). 「非認知能力」の育て方 : 心の強い幸せな子になる 0 ～ 10 歳の家庭教育　小学館

藤田 文 (2002).　幼児と短大生の世代間コミュニケーション（V）－コミュニケーションの連続性－　九州心理学会第 63 回大会 ,36.

藤田 文 (2004).　幼児のコミュニケーションに対する効力感と幼児と接した経験との関連　日本発達心理学会第 15 回大会発表論文集 ,380.

藤田 文 (2008).　幼児と短大生の世代間コミュニケーション（VI）－幼児と接することの効力感によるスキンシップの違い－　日本発達心理学会第 19 回大会 ,546.

Meins,E.(1997). Security of attachment and the social development of cognition. East Sussex,UK:Psychology Press.

Meins,E.,Fernyhough,C., Wainaright,R., Clark-Carter,D., DasGupta,M., Fradley,E., & Tuckey,M. (2003).Pathways to understanding mind:Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. Child Development,74,1194-1211.

毛利 泰剛 (2018).　保育者養成課程における学生の実習経験によるイメージの変化の検討－遊びイメージと子ども観について－　福岡女学院大学紀要人間関係学部編 ,19,31-37.

篠原 郁子 (2006). 乳児を持つ母親の mind-mindedness の測定　心理学研究 ,77,244－252.

篠原 郁子 (2011). 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達 : 生後 5 年間の縦断調査　発達心理学研究 ,22,3,240-250.

Suzuki,M.,Tsujiko,K., Toyama,N., Uehara,M., Kobayashi,J. (2023).　Mothers Maintaining Stable Parenting after Participation in Parent Training: A Qualitative Study 日本健康学会誌 ,89,4,121-135.

田中 真衣 (2023). 感情に振り回せされない子育て : 親子が変わる〈SomLic ペアレント・トレーニング〉　佼成出版社

【あとがき】

本研究の実施におきまして，大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科藤田研究室卒業生三浦綾乃さんに多大なるご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。本研究の一部は，2007 年九州心理学会第 68 回大会で発表された。